広報 留萌 1990 2 No.383

特集 肥満は病気のはじまり

◆連載 いま留萌むかし 第三十八話

●留萌のチャシコツ

留萌市と増毛町の境近くの沢の奥にチャシッコツがある。チャシウンナイチャシコツという。

チャシというのは、昔、アイヌの人たちが造った砦といわれている。全道的に有名なものとしては寛文9年（一六六九）のシャクシャインの戦いのときにシャクシャインがたてこもったシブチャリのチャシがある。その他チャシの役割としてはコタンの有力者の家であるとか、コタンの狩猟範囲を示すものとか、コタンの中で争いがあったときに、そこで話合いをする場所であったとか、祈りをする神聖な場所であったとかいわれている。

本来アイヌ語のチャシとは柵を意味する言葉だという。現在でも日高地方では牧場の柵のことをサシという所がある。つまり、アイヌ語の本来の意味は柵で囲った場所のことをいったと考えられる。ただ和人の書いたふるい文献にはほとんど戦いに使用した砦として描かれている。

現在北海道全体で四百ヵ所以上のチャシコツ（チャシ跡）が見つかっている。それも道東の太平洋側やオホーツク海側に多く見つかっている。増毛から天塩までの日本海側では増毛町の大別苅のカムイエトチャシコツと天塩町の川口チャシコツと留萌のチャシウンナイチャシコツの三ヵ所だけである。その他に地名にチャシのついたものが何個所か確認できるが全道的に見て数が少ないのは否定できない。

チャシウンナイチャシコツは増毛との境界のアフシラリ川より留萌よりの小沢の奥にある。沢と沢に挟まれた台地の先端に尾根を区切るように二本の空壕が掘られている。城でいえば本丸と二の丸だけの砦といって良い。

ここには二つの伝説が残っている。いずれも幕末の探検家松浦武四郎が書き残したものである。「再航蝦夷日誌」には、

―チャシコトンナイ此処于昔小人しまの住みしと云城跡有。方二丁四方位の土垣有中ニおりおり土器の古きもの出るよし聞けり―

小人しまとはアイヌの人たちの伝説に出てくるコロポックルのことで、コロポックルがこのチャシを築いて使ったことになっている。

また、「西蝦夷日誌」では

―チャシュンナイ（小川）名義、棚ある沢の義、此処昔し合戦有し時棚を結びし跡也と―

これではアイヌの人たちが戦いに使用するためにこのチャシコツを築いたことになっており、ここでアイヌの人たちの戦いがあったことが推察される。

このチャシを使用したアイヌの人たちがどこに住んでいたのかということが問題になるが、この近くには近世の礼受コタンがあった場所であり、きっとそこに住んでいたアイヌの人たちだったろうと考えられる。

アイヌ期の留萌を考える上で貴重な遺跡といえよう。

チャシウンナイチャシコツ

平成2年2月／発行・留萌市
編集・企画 振興室
印刷・株式会社 留萌新聞社